

アールス (秋冬作)

<地帯区分：熊本Ⅰ>

品種 \ 月	8	9	10	11	12	1
セイヌ 秋冬Ⅰ	○ 8/16	◎ 9/3 ○ 9/5	× 9/26 ◎ 9/30	× 10/30	□ 11/23	□ 12/29
セイヌ 秋冬Ⅱ	○ 8/26	◎ 9/15	× 10/10 ○ 9/25	◎ 10/25	× 11/24	□ 12/7 □ 1/23
パリス 秋冬	○ 8/26	◎ 9/15 ○ 9/5	× 10/13 ◎ 9/30	× 10/30	□ 12/10	□ 12/29
ベネチア秋冬Ⅰ	○ 8/16	◎ 9/3 ○ 9/5	× 9/26 ◎ 9/30	× 10/30	□ 11/23	□ 12/29
ベネチア秋冬Ⅱ	○ 8/26	◎ 9/15 ○ 9/10	× 10/10 ◎ 10/5	× 11/5	□ 12/7	□ 1/5
テムズ 秋Ⅱ	○ 8/16	◎ 9/3 ○ 8/30	× 9/28 ◎ 9/19	× 10/17	□ 11/25	□ 12/14
テムズ 秋冬Ⅰ	○ 8/26	◎ 9/15 ○ 9/5	× 10/13 ◎ 9/30	× 10/30	□ 12/10	□ 12/29
雅早春晩秋系	○ 8/15	◎ 9/3 ○ 9/5	× 10/3 ◎ 9/30	× 10/27	□ 11/20	□ 12/17
雅秋冬系	○ 8/15	◎ 9/3	× 10/3 ○ 9/10 ◎ 10/5	× 11/5	□ 11/20	□ 12/25

<地帯区分：熊本Ⅱ・Ⅲ>

品種 \ 月	8	9	10	11	12	1
セイヌ 秋冬Ⅰ		○ 9/5	◎ 9/30	×		□ 12/29
セイヌ 秋冬Ⅱ	○ 8/26	◎ 9/15	×		□ 12/7	
パリヌ 秋冬	○ 8/26	◎ 9/15	×		□ 12/10	
ベネチア秋冬Ⅰ	○ 8/16	◎ 9/3	×		□ 11/23	
ベネチア秋冬Ⅱ	○ 8/26	◎ 9/15	×		□ 12/7	
テムズ 秋Ⅱ	○ 8/16	◎ 9/3	×		□ 11/25	
テムズ 秋冬Ⅰ	○ 8/26	◎ 9/15	×		□ 12/10	
雅早春晩秋系	○ 8/16	◎ 9/3	×		□ 11/25	
雅秋冬系	○ 8/16	◎ 9/2	×		□ 12/1	

技術体系

1 作型の特徴

この作型では、播種期から定植期までの生育初期はほぼ適温状態で推移するが、定植期以降の果実肥大期、成熟期にかけては低温となるため保温が必要となり、さらに後期においては、暖房機による加温が必要になる。従って、温度管理と併せて、草勢調節のための水分管理が重要な栽培ポイントとなる。収穫期は、12～1月の期間となる。

2 適応地域
全域

3 栽培条件
春作の項を参照

- 4 施設装備
- ・連棟ハウス
 - ・保温被覆資材（カーテン）及び暖房機
 - ・灌水施設
 - ・炭酸ガス施用装置

5 経営目標

- (1) 収量 2.8 t / 10a
 (2) 投下労働時間 310 時間 / 10a
 (3) 所得率 40%
 (4) 経営規模 25a
 (家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性

「セイヌ秋冬Ⅰ」

葉は小葉で草勢はやや弱い。果形は丸形でネットは強く盛り上がる。

「セイヌ秋冬Ⅱ」

草姿はセイヌ秋冬Ⅰに類似するが、低温期の果実肥大に優れており、さらに低温期の栽培に適している。

「ベネチア」

葉は丸形の大葉で、草勢は強い。葉色は全期間淡い。ネットは細く密に発生する。

「サンデー冬型」

葉は大きく、草勢は強い。果実は球形でネットは強く発生する。果皮は白肌である。温度が不足すると果実は強くしまる。

2 育苗

(1) 播種期

加温栽培であるが、施設装備を考慮して、播種期を決定する。

(2) 黄化症、黄化えそ病等の対策

黄化症、黄化えそ病等の対策として、育苗ハウスには、コナジラミ、アザミウマ、アブラムシの侵入防止等を図るため、近紫外線カット（UVカット）フィルム、0.4mm以下の防虫ネット、黄色や青色の粘着板や黄色粘着テープを用いる。

また、育苗ハウスの周りに反射マルチを設置する。

(3) 播種

本圃10a当り播種量は、本圃の栽植本数を1600株を標準として、2000粒を野菜専用育苗箱に200～250粒を条まきし、たっぷり灌水後乾燥防止のために古新聞で覆う。高温期の播種では降温のために防虫ネット等を被覆し、まき箱の乾燥に注意する。

(4) 鉢上げ

9cmポリポットに子葉が8分展開したとき鉢上げを行う。生育後期の地際部からのつる枯病発生を回避するために、できるだけ浅植えに努める。

(5) 育苗管理

適温域に近い条件下の育苗であるため、育苗管理は容易である。育苗日数は、ポット苗で18～20日で本葉2～2.5枚であるが、定植時の鉢土がくずれない状態で定植する。

張 適温域の管理であるが、適切に灌水管理を行い、老化苗にしない。

3 定植準備

(1) 定植準備

この作型は、生育後期の地温低下と果実肥大が問題になる作型である。従って、畦作りは高畦にし、栽植本数も秋作より減らし、10a当り1600株を標準にする。

この作型も夏期の高温を利用した太陽熱消毒や薬剤を使用した土壌消毒等を行い、土壌環境改善を行った後に定植準備に取りかかる。マルチは古ビニルを利用し、作畦全面に灌水し土壌水分を確保しておく。

また、黄化症、黄化えそ病対策として、防虫ネットや黄色や青色の粘着板や黄色粘着テープを用いる。

作型と栽植密度

作型	ハウス間口	畦幅	株間	栽植本数
秋冬作Ⅰ	5.4m	135cm	45cm	1,600株/10a
秋冬作Ⅱ	6.0m	120cm	52cm	〃

(2) 施肥

秋冬作は、生育後期の気温が低下してくることによって強草勢になりやすく、裂果や硬玉が発生しやすい環境にある。そのため、秋作よりも減肥する。

秋冬作Ⅰ、Ⅱにおける施肥量（Kg/10a）

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	備考
基肥	12	12	12	基肥中心とし、原則として追
追肥	—	—	—	肥は行わない。粘質水田土壌
合計	12	12	12	では10～20%減肥する。

*P₂O₅は、土壌条件により増減する。

4 定植

定植当日、鉢には十分灌水しておく。初期の活着は重要であり、定植鉢の周りに灌水を行い活着促進を図る。

また、セル成型苗の場合は、定植後の灌水作業はポリ鉢育苗以上に重要であり、活着まで状況に応じて1日当たり2回の灌水が必要になる。

5 定植後の管理

(1) 誘引と整枝

秋作の項を参照

(2) 結果枝の選定

結果枝は、基本的には12～14節から発生してくる側枝を2～3本残すが、生育状態に併せて若干の節位の変更を行う。また、品種によっても、結果枝の節位は変更する必要がある。

結果枝は、側枝が太くなった所から上位の節位で、雌花が充実しているものを選ぶ。

(3) 主枝の摘心

この作型では、下位葉から葉面積を確保し、草丈を低く作り、生育後半に下位葉まで十分に光が当たるようにする。

主枝の摘心は交配当日か前日に行う。なお、摘心時の葉の大きさは、秋作と同様に、葉が半展開の所とする。

(4) 交配と摘果

ミツバチを利用する。開花時には、日付を記録し、収穫期の判定に用いる。

摘果は、交配後5～7日頃に果実が鶏卵大になった時期に行う。変形果、病果等を摘果し、果形は丸形よりもやや縦伸びし、果皮に光沢のあるものを残す。摘果が終われば、直ちに玉つりを行う。

(5) 袋かけ

秋冬作メロンは、袋かけの時期には日射も弱まり、ハウス内湿度も高まるため、袋かけは果皮の色、果実の硬化程度を観察しながら、ネットの縦割れが始まった時期に行う。

(6) 温度管理

気温が下降していく作型であり、早めに暖房機の点検を行い、暖房やカーテンの準備をしておく。

交配期が9月下旬のものについては、昼夜の温度差があり適温になるが、ネット発生前の蒸しこみは強く行わない。

二層カーテン等を設置し、最低気温15℃を確保

するように努める。

(定植期)

9月定植は、日中の高温に注意し、生育後期に草勢低下を起こさないよう換気を十分に行う。

10月定植になれば、夜間の気温が低下してくるため、最低気温が18℃以下になる頃から18℃を維持して加温する。

(生育期)

生育期は、夜間最低気温を18℃で維持する。日中は、午前中30～32℃、午後26～28℃で管理する。

(交配期)

夜間最低気温20℃を維持し、午前中30～32℃、午後26～28℃で管理する。この時期は、天候不順により、曇雨天が続きやすく、ミツバチの活動が悪くなる。こうした場合には早朝から暖房機を作動させ、気温20℃以上に高め、ミツバチの活動しやすい環境状態の確保に努める。

(ネット発生期)

秋冬作メロンは、果実硬化が強くなりやすい時期の栽培であるため、着果以降は最低気温20℃を確保し、午前中30～32℃、午後26～28℃を目標に管理する。その後は、果実の硬化程度を観察し、強ければ最低気温を2℃高めて22℃とし、日中もやや高めの午前中32～33℃、午後26～28℃で管理し、1日1回は換気して乾燥させることが重要である。

なお、この果実硬化期（着果後10日頃）から縦ネット発生初期は、高温多湿条件で玉あざ（果皮の斑点）が発生しやすいため、夕方のハウスを閉めた後に28℃以上にならないように管理しなければならない。天気が良く、気温の高い場合に特に注意が必要である。

(仕上げ期)

着果から30～35日でネットを完成させ、仕上げに入る。生育後半の草勢低下を防ぐために昼間蒸し込み過ぎないようにし、日中、夜間の温度を下げる。また、ハウス内の除湿を行うことによってネット発生を止め、ネットの盛り上がりを促す。草勢の状態によっても変わるが、仕上げの初期は最低気温18℃とし、収穫5日前頃から16℃に管理する。日中は、午前中28～30℃、午後は25～26℃を目安に管理する。

(7) 灌水管理

(活着～交配期)

活着後は株元灌水を止め、徐々に畦面を乾燥させていくが、この作型は、秋作よりもさらに生育後半は低温少日照になることから、葉面積確保のために少量の灌水をすることもあ

(着果～果実硬化期)

着果を確認したら、果実の縦伸びを促進するために、少量の灌水を行う。土壌の種類によって灌水量を多少変える必要がある。

(ネット発生期)

一次ネットが発生し始めたら、果実のゆるみ、果皮色の変化を確認し、ハウス内湿度確保も兼ねて、畦間に散水程度の灌水を行う。さらに、ネットの発生状態を確認しながら徐々に灌水量を増やし、二次ネットが発生し始めたら硬化程度を確認し、ゆるんでいたら畦面へ十分な灌水を行い、果実肥大とネットの発生を促す。

(仕上げ期)

着果から30～35日経過すれば、ネットを終了させ仕上げに入る。乾燥しやすい圃場などでは40日までとするが、過剰な灌水は行わない。灌水を止め土壌を徐々に乾燥させるとともに、午後は換気を十分に行い、ハウス内湿度を下げ、遅れネットを発生させないようにする。

5 収穫

秋冬作メロンでは、着果から収穫までの成熟日数は60～63日が目安となる。